

2020年度・2021年度 近畿・北陸・東海ブロック大会 及び奈良県性教育研究大会報告

奈良県性教育研究会 会長 高田恵美子

1 はじめに

コロナ禍において、2020年度・2021年度の近畿・北陸・東海ブロック大会及び奈良県性教育研究大会は対面開催が困難となりました。

近年、学術集会や研修会がオンデマンドで開催される中、ICT環境とその技術を持たない本研究会にとって、コロナ禍の研究會運営は危機的状況です。しかし、「奈良県性教育研究会の歩みを止めない」を合言葉に、会報を発行し、紙面開催といたしましたのでご報告いたします。

2 2020年度・2021年度報告

1) 会報1号(2021年1月7日発行)

会報第1号は、コロナ禍における子どもたちの性の問題や性教育の実践状況、希望する研修内容などについて、会員に原稿を募りました。以下は、会員の実践報告の一部です。

コロナ禍における新しい生活様式と、日々の消毒に翻弄されていますが、生徒はよく頑張っています。今年度、転勤したため、新たな学校で、生徒の実態把握から始めています。

3年生を対象とした助産師による講演会が年間計画に位置付けていたため、なんとか3密を防ぎ、講義を中心に、体験は代表者が行うことで実施しました。

講演内容は、月経痛の対処の仕方や、排卵から受精・胎内の様子や出産の過程、妊婦へのいたわり、生まれてくる命の尊さ、生まれてこられたことこそが奇跡であり、その赤ちゃんに愛情をもって育てることの大切さなどです。胎内の赤ちゃんの心音や赤ちゃんの泣き声、出産シーンについては、CDやビデオを視聴しました。

体験では、10キロの米を用意し、二人の元気な男子生徒の腹部に巻き付け、割烹着を着て、

「寝起き・階段の上り下り・顔を洗う・爪切り」を体験してもらいました。「足元が見えない。重たい、怖い。大変な作業だ。将来、手伝ってあげたい」などの感想が自然にでてきました。

さらに、流産や死産をした人にサポートを行う助産師の思いについても語っていただき、生徒は、命の誕生という素晴らしい場面に立ち会うだけではない助産師さんの仕事も理解することができました。時間も内容も縮小しましたが、講演会を実施できてよかったですと思います。また、この後を受けて、性感染症とエイズの予防について、赴任先で初めての授業をしていきます。

(奈良市立飛鳥中学校 市原良美)

2) 会報2号(2021年3月7日発行)

会員より、月経困難症が疑われる児童生徒への対応や指導について質問が多かったことから、会報2号は、八田真理子先生(聖順会 ジュノ・ヴェスタクリニック八田 理事長・院長)に紙上講演を依頼し、「『体、守るのは自分だよ』～産婦人科医による性教育～」を掲載しました。

内容は、産婦人科医としての臨床経験や実際の診療現場でのエピソードを中心に、臨場感を大切にし、時には辛い経験をした患者さんの言葉も紹介しながら、思春期の子供たちが性を自分事として捉えてほしい、正しい知識を持ってほしいという願いが込められたものです。

また、月経困難症、緊急避妊、産後うつなどについては、Q&Aでチェックリストや対応方法などが掲載されたため、会員からは根拠を持って指導できるという感想も寄せられています。

会報2号は、2019年度近畿・北陸・東海ブロック大会の参加者と、奈良県内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の養護教諭にも郵送し、広く関係者に情報提供をしています。

3)会報 3号(2022年2月7日発行)

会報第3号は、檜垣志保先生(奈良市立朱雀小学校 校長)に紙上講演を依頼し、「子ども達に生きる力・命をはぐくむ性教育とは」を掲載しました。内容は、学校における性に関する指導の取り組みや、「包括的性教育」の指針を参考にした性教育カリキュラムの検討、学校における性教育の推進体制の構築などについてです。紙上講演より、管理職のリーダーシップのもと、家庭や地域と連携し、学校全体で性教育に取り組んでいくことの重要性が再確認されました。

また、以下のように、月経に関する会員の実践や意見も掲載しました。

橿原市では、「コロナ禍における女性支援」の目的で、学校に生理用ナプキンの配布がありました。本校では、管理職と相談の結果、4~6年生の女兒に月経指導を行ったあとで数枚ずつ配布することになりました。

4年生では、月経の仕組み、手当てのしかた、安心ポーチ(ナプキンやサニタリーショーツのセット)の準備などについて、スケッチブックに書いたイラストをもとに指導しました。

5・6年生では、イラストで月経のしくみを振り返った後、児童の質問に答えていきました。体の変化が始まった5・6年生からは、具体的な疑問や悩みがたくさん出て、時間が足りなくなるクラスもありました。普段の生活の中で、児童が月経などについて大人に質問することが難しい状況にあることがわかりました。これからも4年生以降は、各学年で1年に1回は月経について語る機会を繰り返し作っていくことが必要だと感じました。

(橿原市立金橋小学校 竹野亜由美)

学校生活、日常生活に大きな影響を及ぼす月経について、2021年11月6日、NHK ジェンダーサイエンス(2)「月経 苦しみとタブーの真実」が放映されました。今まで、私が捉えていなか

った視点で作成されていてとても勉強になりましたので、感想を述べたいと思います。

女性の一生における月経回数は、栄養状態が良好になったこと、第1子出生時の平均年齢が30.1歳と高くなり少子化が進んでいることを背景に、昔は約50回でしたが現在では約450回になり、約9倍に増加しています。このため、月経困難症や子宮内膜症で苦しんでいる方も多く見られます。TVを視聴し、月経の仕組みや役割について性別を問わず正しく知らせることは、本研究会の使命であると思いました。

私は、これまで二次性徴の授業目標を「子供たちが成長の喜びを感じることができる」とし、力を入れて指導してきました。しかし、月経を健康の視点で捉え、子供たちが生涯を通じて適切に判断し行動できるための指導も今後大切ではないかと考えます。

一方、みんなの生理と一般社団法人日本若者協議会 は学生(小・中・高校、専門学校、大学など)に対して「生理休暇」に関する意見を聞くことを目的にアンケート調査を行っています。その結果、9割以上の学生が「生理によって学校を休みたいと思ったことがある」にもかかわらず、そのうち68%が休むのを我慢していることがわかり、学校にも生理休暇を導入するよう文部科学省に要望しています。

以上のことから、本研究会も月経のメカニズムや月経に関連した病気や治療などについて、研究を深めていかなければならないと思います。

(奈良県性教育研究会 副会長 児玉なつ子)

3 おわりに

現在、近畿・北陸・東海ブロックの交流が滞っています。会員の皆様より情報提供をいただき、活発に交流をしたいと考えておりますので、よろしくお願ひします。

奈良県性教育研究 naraseikyoku@gmail.com